

## 書評『対中国輸出管理入門』（CISTEC）

### 1. 待望の入門書

中国向けの輸出管理で多くの人が感じていた困難は、欧米の Web サイトはもとより Chaser にしても、懸念情報が横文字でしか手に入らないことでした。取引がかくも盛んで、現地進出企業もかくも多いというのに、これは大変こまったことでした。

なぜなら日本企業が現地で活動する際に、横文字で相手を認識することは殆どないからです。中国語ができる者はいわずもがな、通訳を通す場合でも現地の企業・機関名を英語で耳にすることは滅多にない（通訳が日本語になおしてくれる）のです。

たとえば Chaser はじめ多くの懸念顧客リストに「XX Academy」という記述があります。私など現地経験があるにもかかわらず、長い間これを「XX 学会」と理解し、「そんな名前のコワモチ組織あったかしら」と悩んでおりました。それが「XX 研究院」とか「XX 科学院」を指すと知ったのは、それほど昔のことではありません。

現地経験者でさえこれですから、一般の輸出管理担当者においては、手探りで審査するしかなかったと思います。その結果、本来なら要注意の機関を見逃すこともあったでしょう。その反対に、似た名前の機関と区別がつかず過剰に警戒してしまう（たとえば核開発機関である中国工程物理研究院と、中国科学院の見分けがつかない）こともあったと思うのです。

いわば私たちは、薄暗がりの中を手探りで輸出管理をしていたようなものなのです。そこへ明かりを持ち込み、ユーザーの目鼻をつけやすくしようと編まれた本書は、まさに待望の入門書といえるでしょう。

### 2. 数々の長所

個別に本書のすぐれている点を見ていきましょう。

#### ① 軍関係の手際のよい要約

一般の日本人にとっては解放軍の内部や関連機関はブラックボックスも同然です。本書の解説で、全体像と主要組織名が初めて頭に入るといえる人も多いのではないのでしょうか。特に最高級懸念度の組織である中国工程物理研究院の解説は（同研究院が外国ユーザーリストに掲載されていない分いっそう）有益だと思います。

#### ② 日本語版では珍しい「軍工集団」の解説

外国ユーザーリスト所載企業の大半がこれに属することからも分かるように、取引審査の実務においては、個々の需要者と「軍工集団」の関係の有無は必須のチェックポイントです。「軍工集団」は中国語サイトではしばしば紹介記事を見ますが、今まで日本語版を目にすることはほとんどありませんでした。これも重要な知識です。

#### ③ 「軍事四証」制度の解説は初めて見た

恥ずかしながらこの制度については知りませんでした。（認定証のプレートは見たことがあります、全体像が分かっていなかった）これは本書のお手柄でしょう。

#### ④ 外国ユーザーリスト掲載企業の解説

冒頭に述べたように、漢字表記のないユーザー情報は価値が半減します。本書の解説で初めてリスト掲載企業について実感を持つことができた読者も多いことと思います。

私もこの解説を見て自分が「北方工業」と「北方工業集団」を混同していたことを知りました。(お恥ずかしいことですが勉強になりました)

また成都蓉生薬業について、シーメンスとの業務提携の事実を指摘したところ(61頁)は「リスト掲載でも即危険とは限らぬ」ことをアピールした気骨ある記述と感じました。

### 3. 若干の問題点

本書にもいくつか気になる箇所があります。今後の改訂への参考という意味も込めて書いておきます。

#### ① リテラシーない読者には副作用がある

昨今の中国警戒気運の中では、「アブナイ需要者(毒キノコ)を教えてくれるハウツー本」として読む人が多いのではないかと思います。「リスクがある(単に賞味期限を過ぎたものも含まれる)」と「危険物(毒キノコ)」の違いを理解せず。

そしてたとえば「清華大学が軍事四証認定だと? おとなしそうな顔していながら悪い奴よ。やっぱり中国はね」と即断したりするわけです。おそらく同大にも国防とは関係の薄い(無害な)部署や活動は多々あり、それらへ欧米企業が入り込んでいる筈ですが。あるいはその逆に、四証資格認定の記事が目下見当たらない他大学については審査が極端に甘くなるとしたら、それも副作用と言わざるをえないでしょう。

本書も末尾で「リスクがある需要者でも最終用途などに懸念が無いことを説明できれば取引できる可能性は大いに高まります」と述べてはいるのですが、どれだけの読者がきちんと理解してくれることか。これはリスク情報の参考書全般に共通する難題ですが。

#### ② 解放軍関係機関の解説(14頁)は誤解を生まないか

「包括許可取扱要領」では、非ホワイト国向けを含んだ一定の仕向地・品目の組み合わせを包括的に許可する「特別一般包括許可」において、非ホワイト国の需要者が「軍若しくは軍関係機関又はこれらに類する機関」の場合は事前に届出が必要であると規定されています。「軍若しくは軍関係機関又はこれらに類する機関」とは、「軍隊又は国防、治安の維持若しくは安全保障等を目的とする機関」であり、警察及び情報機関も含まれます。中国では、武装警察部隊を管轄する「公安部」、情報機関である「安全部」、国家機密情報を管轄する「保密局」などが軍関係機関になります。

たしかに武装警察は解放軍から分かれてできた組織です。しかし「包括許可取扱要領」の定義を用いるのなら、「ただの交番」や「警察の鑑識機関」、「警察病院」であっても「軍関係機関」に分類されます。(病院の場合は、たとえ軍関係であっても「病院等において医療行為に用いられることが明らかな場合は届出不要とされていますが、それでも「軍関係機関とされること」に変わりはありません) 公安部は「怖い武装警察を管轄するか

ら軍関係機関」とされるのではなく、「警察であるだけで軍関係機関」なのです。たとえシンガポールやメキシコであっても「警察ならば軍関係機関」なのです。本書の解説は初心者をミスリードする記述というべきでしょう。

### ③ 「十一大軍工集団」の構成要素（19頁）

ネット検索で表示される「十一大軍工集団」に「中国電子情報産業集団公司」は含まれていません。代わりに登場するのが「航空工業第一集団公司」と「航空工業第二集団公司」。

『中国の軍事力』（茅原郁生編）も311頁で、電子情報の代わりに航空第一・第二を入れて「十一大軍工集団公司」と表示しています。（航空第一と第二が2008年に合併して現在の「中国航空工業集団公司」になった）

従って「十一大」という呼び方、最近は聞きません。（電子情報を入れない）「十大軍工集団」ならばよく見えますが。

私は別段「電子情報集団」を安全牌といたいわけではありません。（ネットの百度百科でも国防科工局のページを見ると、「軍工単位」として「電子情報集団」が表示されているのは承知しています）今回は、ネット検索をされる熱心家が迷われるかもしれないという意味で一言申し上げた次第です。

### ④ 航天科技集団（CASC）傘下の研究院はいくつある？

62頁では9つ、73頁では8つと述べています。

### ⑤ 「Xiangdong Machinery Factory」は「向東機械廠」だろうか？（78頁）

実は「Xiangdong」に関する外国ユーザーリストの記述のソースは、米国 Entity List ですが、本家米国においても、この情報で組織を特定するのは困難という声があります。

#### 【Wisconsin Report 抜粋】

The information provided is insufficient to identify this particular entity - there are several entities in China with current or former names that can be translated in full or in part as "Xiangdong Machinery Factory" (註 132 参照)

#### 【註 132】

- Henan Xiangdong Machinery Factory Enterprise Introduction, The People's Government of Nanyang World Wide Web site, <http://www.nanyang.gov.cn/zyk/xxzy19/index.htm> (in Chinese), accessed on March 6, 2008;
- Beipiao Xiangdong Machinery Factory/Machine Works, China Commodity Net, Ministry of Commerce World Wide Web site, <http://ccn.mofcom.gov.cn/622795>, accessed on March 6, 2008
- Bailin Community, Beijing Community Public Service Information Net World Wide Web site, <http://pg.bjcs.gov.cn/sqjs/sqjsAction.go?operate=sqjj&id=1.1.1.13> (in Chinese), accessed on March 6, 2008.  
(<http://www.wisconsinproject.org/pubs/reports/2008/entitylist.htm>)

外国ユーザーリストには漢字表記はなく、「向東機械廠」は本書の推定です。「向東」とい

うのは最も自然な当て字で、正解の可能性も高いのですが、ネット検索した限りではそれらしい企業が見つかりません。(リストに掲載の「別名」から所在地は北京と思われ、「百度百科」で検索すると、「百度地図」サイトで北京にもこの名称の企業が2社あるように表示されますが、詳しく見ると下図のA・Bのように、社名も住所も下記【別名】①～⑦と異なる「ハズレ」でした)



つまり「向東機械廠」の看板を目当てに警戒しても、この企業は見逃してしまう可能性が高いわけです。経済省からより明確な情報が発表されるのを期待しましょう。

それはともかく、この企業に関する本書の解説には疑問があります。

Xiangdong Machinery Factory, within the China Aerospace Science and Industry Corp's (CASIC) Third Academy

【別名】

- ① China Haiying Electromechanical Technology Academy [中国海鷹機電技術研究院]
- ② China Haiying Science & Technology Corporation
- ③ 239 Factory [航天三院 239 廠]
- ④ Beijing Xinghang Electromechanical Equipment Factory
- ⑤ Beijing Hangxing Machinery Manufacturing Corporation [北京航星機器製造公司]
- ⑥ Hangxing Machine Building Company
- ⑦ HiWING Mechanical & Electrical Technology Corporation [中国海鷹機電技術研究院有限公司] …経済省リストにはこの名称なく、本書記述は NTI 情報を参照してのもの <http://www.nti.org/facilities/55/>

【解説】1993年11月に設立された中国航天科工集团公司第三研究院向東機械廠(別名中国海鷹機電技術研究院有限公司)は、中国航天科工集团公司第三研究院(飛行技術研究院)の全額出資子会社で、輸出入権限を与えられた中国初の研究機関です。対艦及び地上

攻撃用巡航ミサイルの研究、設計、開発及び生産を行っています。1993年にはパキスタンにミサイル関連資機材を輸出したとして米国政府から制裁を受けています。

※1 別名の①②と⑦は全く同じものと見てよいと思います。

海鷹机电技術研究院有限公司ホームページ (<http://www.hiwingtech.com/#2>) でも自らを「海鷹机电技术研究院」と名乗っており、名称中の「有限公司」は無視してよさそうだからです。「海鷹机电技术研究院隶属于中国航天科工飞航技术研究院」 「百度百科」にも「海鷹机电技术研究院（三院外贸进出口公司）隶属于中国航天科工飞航技术研究院」という記述があります。<http://baike.baidu.com/view/6271934.htm?fr=aladdin> なお先の「中国航天科工飞航技术研究院」とは、航天科工集团（CASIC）第三研究院こと「三院」を意味します。

また⑦のホームページによると、住所は「北京市丰台区丰台科技园海鷹路1号院1号楼」とあります。

※2 しかしそれが「向東機械廠」を意味する可能性は低いと思います。

なぜなら「三院外贸进出口公司」という「百度百科」の記述からすると、その企業は三院の主要な貿易窓口をつとめているように見えますが、そのような役割の企業に「機械廠」などという名称は似つかわしくないからです。（一般的にそのような命名はほぼありえないといってよい）

※3 他の「別名」についても検討してみましょう。

Beijing Xinghang (④) は「北京星航」のピンイン表記と思われます。「北京星航」は別名「航天三院159廠」。その求人記事(<http://www.kongrong.com/xiaoyuan/beijing/37355.html>) 抜粋を見るとこんなことが書いてあります。

住所；北京市丰台区云岗东王佐北路9号(通讯地址：北京7202信箱3分箱)
簡介；第一五九厂始建于1960年4月，是隶属于中国航天科工集团公司第三研究院的飞航式导弹研制和生产总装厂（又称北京星航机电设备厂）。位于北京市丰台区西南，卢沟桥以西，京石高速公路旁，交通便利。

Beijing Hangxing (⑤・⑥) は239廠(③)の別名と思われます。下記はその求人記事 (<http://www.kongrong.com/xiaoyuan/beijing/442151.html>) 抜粋です。

タイトル；北京航星机器制造公司（航天三院二二九厂）
住所；北京市东城区和平里东街11号
簡介；本公司为中国航天科工集团下属企业，创建于1939年，是集军用飞行器研制生产、民用产品开发和现代服务业发展于一体的大型军民结合型企业。

※4 住所から見るとどうでしょうか？

③・⑤・⑥の「东城区和平里东街11号」は、第二環状路（二環）のすぐ北側。

「丰台区云岗东王佐北路9号」(④)は南西の郊外、市中心部からだとは第五環状路（五環）を過ぎ、盧溝橋を渡って更に5km以上南西に行ったところではあります。

①・②・⑦の「丰台区丰台科技园海鷹路」も南西郊外ではありますが、第四環状路（四

環) のすぐ近くです。

地図を見れば三者の関係が大体つかめると思います。



つまり立地から見ると、「①・②・⑦」≠「③・⑤・⑥」≠「④」であり、「全部がイコールで結ばれた【別名】」などということはありません。所詮は白人さんの仕事ですから仕方ない、といえはそれまでですが。

問題点の指摘・論証というのははっきり分かる形で行う必要があるのですが、ちょっと力瘤の入った書き方になってしまいましたが、全体としてはよく調べて書いてあります。

B5 判小冊子で 3,750 円という値段は CISTEC が発行している他の参考書に比べやや割高に見えますが、本書はほぼ全頁が読者の栄養になるという点で、私は高いと思いません。

(2014.10.9)